翻　訳

主人公は虫たち: *Joyful Noise: Poems for Two Voices*

《翻訳ノート》

Notes on Paul Fleischman's *Joyful Noise : Poems for Two Voices*

石　原　敏　子
ISHIHARA Toshi

以下に訳出したのは、昆虫を題材にした詩が集められたPaul Fleischmanの詩集*Joyful Noise: Poems for Two Voices*から選んだものです。

これらの詩を選んだ理由はいくつかありますが、まずなんと言っても、これらの詩に見られる視点が興味深いからです。一般の人々が普段あまり気にとめることのない虫の世界を詩人は観察し、またそこに耳を傾け、虫たちのよろこびの声を読者にとどけてくれるのです。時にはユーモアをまじえ、また時には静かな語りくちで、バッタや水すましの習性、さなぎから蝶への変身の過程、女王蜂と働き蜂の生活の対比、かげろうの短命など、いろいろな昆虫の生活の様々な側面が伝えられます。昆虫たちの世界をこれほど簡単な言葉で印象深く描きだす作品に出会うことは、そうあることではないことでしょう。

さらに興味深い点は、これらの詩の書き方にあります。この詩集に収められた詩は、その副題が示しているように、二人の読者が同時に読むという形で書かれています。概して読書という行為が個人でなされる孤独なものであるのに対し、Fleischmanは、共同で行う読書作業の楽しさの復権を願っているようでもあります。

ここで、タイトルの“joyful noise”という言葉が重要となってきます。この言葉は、以下に訳した「せみ」の詩の最終行に用いられており、そこでは、短い一生を様々な声で歌い上げるせみの声を、「よろこびの声」と呼んでいるのですが、それと同時に、読者の関わる読書行為をも表していると考えられます。先に述べたように、これらの詩は、ページに印刷された右の欄と左の欄を複数の読者が同時に調子を合わせて読むという想定で書かれており、実際その指示に従ってこの「せみ」の詩を読んで行きますと、音の似た様々な言葉の繰り返しや、言葉のアクロバット的行またがりがあったりして、相手と調子をあわせて読もうとすればする程、かえって調子が乱れ、詩の最後まで来た時には、読み上げる声は、まるでわたしたち人間の耳にきこえるせみの声にも似て、「ことば」としてより、むしろ「おと」と化し、それがとても楽しい経験になるというわけです。他の詩についても同様の効果が生まれますが、特にこの詩では、最終行において「ことば」が狭い意味での（「虫のよろこびの声」という）意味表現を超え、

読者の行為（すなわち「楽しい音を作り出す」こと）のうちに具現化するという別の次元での意味作用をなすおもしろさがあります。二人で読むよりも、もっと多くの人で一斉に読みますと、さらに大きな「おと」となり、楽しさも倍増します。Fleischmanの詩は、わたしたちに、虫たちが共同体を成して生活していることを再び考え、共に行動する楽しみを、そして他の人と一緒にいることを楽しむ感覚を取り戻すよい機会を提供してくれるようです。この点でも、この詩集ははかり知れない可能性を持っていると言えるでしょう。

この詩集のもたらす楽しさは、この作品を別の文脈で捉えるとき、一層明らかになります。その文脈とはNewbery児童文学賞の歴史です。この賞は、アメリカ合衆国で最も権威ある児童文学賞で、毎年、その前年に出版された児童文学作品の中から最も優れたものに贈られます。イギリスでは、早くから児童のための本が発達し、19世紀に児童文学はその黄金時代を向かえましたが、独自の児童文学が一つのジャンルとしてまだまだ確立されないアメリカで、一層の努力がなされることをねらいとして、18世紀イギリスで児童文学書の販売に力を注いだJohn Newberyの名にちなんで1922年に創設されました。*Joyful Noise*は、1989年に金賞を受与されています。ここでNewbery賞に言及するのは、この賞の受賞を*Joyful Noise*の優秀性の証しとするためだけではなく、むしろ、他の受賞作品と比較した場合に見えてくる*Joyful Noise*のユニークさを指摘したいからです。

Newbery賞の80年の歴史をたどると、その受賞作は、ほとんどが散文で書かれた小説で占められています。たとえば、1981年から2000年までの金賞受賞作を見てみますと、韻文で書かれたものは、Nancy Willardの*A Visit to William Blake's Inn: Poems for Innocent and Experienced Travelers*（1982年受賞）、Karen Hesseの*Out of the Dust*（1998年受賞）と*Joyful Noise*があるのみです。これら三作品中、*Out of the Dust*は、詩がつなぎ合わされて、母を亡くした一人の少女の成長の過程をたどっていくという物語を構成しており、小説に近いものとなっています。それに対し、他の二作においては、ストーリー性は重視されていません。従って、20年の間にストーリー性以外の理由でこの金賞を受賞した詩作品として、*Joyful Noise*は、*A Visit to William Blake's Inn*と並んで、注目に値する作品と言えます。

もちろん、*Joyful Noise*および*A Visit to William Blake's Inn*がすばらしい作品として認められる理由は、こうした韻文という表現媒体のユニークさのみにあるのではないということは言うまでもありません。それよりも、表現媒体と作品の扱う内容とが効果的に結びついているからでしょう。

Newbery賞受賞作を何冊か読んでいきますと、そこに映し出される時代や社会が個々の作品によって異なるのは当然ですが、そうした個々の場面設定を超えて、内容およびストーリーの展開の仕方に、ある共通するパターンが見えてきます。再び、1981年から20年間の受賞作を例にとってみますと、その多くが現代や過去のアメリカの社会や家庭などを扱っており（Patricia MacLachlan作、*Sarah, Plain and Tall*やSharon Creech作、*Walk Two Moons*など）、その他

には、中世のイギリスや（Karen Cushman 作、*The Midwife's Apprentice*）、あるいは、第２次大戦時のヨーロッパを舞台にした作品（Lois Lowry 作、*Number the Stars*）や、架空の王国を扱ったファンタジー（Robin McKinley 作、*The Hero and the Crown*）、未来の「ユートピア」を描く作品（Lois Lowry 作、*The Giver*）などがバランスよく選ばれています。このように場面設定は多岐にわたりますが、どの作品においても中心に据えられているのはこどもであり、彼らを取り巻く家族や友人との関係に焦点があてられています。そして、こどもたちがそれぞれの問題と対峙し、いかにそれを解決していくか、その成長をたどっていくという筋立てになっている場合がほとんどです。

こうした作品を読むことにより、同様な問題を実際に抱えるこどもたちが勇気づけられたり、またそうした問題に悩むこどもたちに対する理解を深めていくことが期待されていることは明らかでしょう。

これら受賞作品をおとなが選んでいる限り、そして更に大きな理由として、おとなにはこどもを導き育てる責任があるため、作品には、おとながこどもにどういうことを学んで欲しいと考えているか、が反映されることになります。こども向けに書かれた作品の多くにおいて、主人公はこどもでありながら、彼らの行動のうしろにおとなのこどもに期待する価値観が見え隠れするのは当然のことといえるでしょう。多くのおとなにとって、児童文学というジャンルは、それを通してよりよき人間を作っていくための教育手段の一つになってしまう傾向があることは、否めないようです。また、こどもの成長のために児童文学を活用していくこともおとなの責任といえるでしょう。

こうした教育的メッセージが、ストーリーの中で突出することなく、むしろ筋立てや人物設定により無理なくストーリーの中に吸収され、自然に読める読み物、そして、わくわく、ハラハラしながら先へ読み進めたくなるような、こどもに受容されやすい作品へと作り上げることに成功していること、これが Newbery 賞受賞作選定の一つの基準と言えるでしょう。

こうして選ばれた作品群ですが、その中で、*Joyful Noise* と *A Visit to William Blake's Inn* は、他の作品には見られない朗らかな明るさが特徴となっており、そこでは、教育的メッセージは全く前面に出てくることはありません。両作品とも、非日常的な表現手段である韻文を効果的に用いることにより、毎日の生活の中で見落としていまいがちな生命のいくつもの "joyful" な営みをきわだたせ、軽妙なリズムで一緒に歌うことへと読者をいざなうことに成功しています。

A Visit to William Blake's Inn は、William Blake の詩集を愛読する作者 Nancy Willard が *Songs of Innocence and Experience* をはじめとする Blake の詩にひらめきを得て書いたものです。Blake が主人を務める宿屋へこどもが泊まりにやってきます。そこでは竜や天使、ウサギなどが働いており、他にもトラやクマがいます。こどもはひまわりやねこといった他の客と時間を共にし、また Blake や動物たちと一緒に天の川へ旅したりもします。こうして、人間と

動物、植物、そして宇宙までもが一体となった世界が、軽妙な韻文で描き出されていきます。このように、読者はその音を楽しみ、ノンセンスともいえる非日常の世界に身をひたし遊ぶことができるのです。この宿屋で客たちは「楽しく憩い」（“take/ their joyful rest”）、「楽しく食事をする」（“break/ their joyful bread”）と書かれています。もちろんこの “joyful” という単語の選択は偶然であるにしろ、この詩のもくろむところが「楽しい」時間の経験であるという点で、*Joyful Noise* と共通しています。

Joyful Noise の受賞には、多くの図書館員からの推薦が力となったようです。図書館での読み聞かせの場で、この詩集がこどもたちに大いに支持されたという事実は、これらの詩が読んで楽しい作品であることを証明しています。さらにこの本の選奨は、わたしたちが生きる社会で、失われつつある自然への関心の高まり、自然環境保護にむけての運動が進められているという流れを反映してのことでもあるでしょう。この詩集は、自然への関心、ひいては私たち自身の反省へともつながる道を、決して大人の視点から説いたりせず、教育的なそぶりを見せることなく、まさに自然なやりかたで、楽しい音でもって導いてくれる、素晴らしい作品であるといえるでしょう。そこでは主人公は虫たちであり、それを読むこどもたちに他なりません。

Paul Fleischman は、カリフォルニアのモントレーで生まれ、サンタモニカで園芸家の家庭に育ったそうです。園芸を愛する一方、著述をすすめ、絵本や若い読者向けの本、小説、短編集などの他に、*Joyful Noise* と同じ形式で書かれた *I Am Phoenix: Poems for Two Voices* という鳥たちの生活をうたう詩集もあります。またノン・フィクションも書いているようです。1997年出版の *Seedfolks* は、下町のごみ捨て場と化してしまった小さな土地に一人の少女がまめの種をまくところからストーリーが始まり、じょじょに近所の人たちが関心を持ち始め、さまざまな民族的背景を持つ人々の間に、コミュニティが出来上がっていく様子を、13人の語りをとおして描く心あたたまる掌編です。*Joyful Noise* で示された虫たちの代表する自然への愛情のこもった視線は、ここでも、植物と人間の成長を見守る視線として保たれています。

隣の人と一緒に音を作り楽しむ、一緒にものを育てていく、それこそ今わたしたちに一番欠けている、従って、今一番必要とされるものではないでしょうか。堅いことはこれ以上言わないことにしましょう。ただ純真に虫の音に耳をすませ、ともに育てる感覚を養っていきたいものです。

Fireflies

Light

Night
is our parchment

fireflies
flitting

fireflies
glimmering

glowing
Insect calligraphers
practicing penmanship

Six-legged scribblers
of vanishing messages,

Fine artists in flight
adding dabs of light

Signing the June nights
as if they were paintings

flickering
fireflies
fireflies.

Light
is the ink we use
Night

We're
fireflies
flickering

flashing

fireflies
gleaming

Insect calligraphers

copying sentences
Six-legged scribblers

fleeting graffiti
Fine artists in flight

bright brush strokes
Signing the June nights
as if they were paintings
We're
fireflies
flickering
fireflies.

Cicadas

Afternoon, mid-August
Two cicadas singing

Five cicadas humming
Thunderheads northwestward
Twelve cicadas buzzing

the mighty choir's
assembling
Shrill cica-
das
droning

Three years
spent underground

in darkness
Now they're breaking ground

splitting skins
and singing

rejoicing

fervent praise
for heat and light
their hymn
sung to the sun
Cicadas

Two cicadas singing
Air kiln-hot, lead-heavy
Five cicadas humming

Twelve cicadas buzzing
Up and down the street
the mighty choir's
assembling

Ci-
cadas
droning
in the elms
Three years

among the roots
in darkness

and climbing up
the tree trunks

and singing
Jubilant
cicadas
pouring out their
fervent praise

their hymn

Cicadas
whining

whin-
ing

whir-
ring

pulsing
chanting from the treetops
sending
forth their
booming
boisterous
joyful noise!

ci-
cadas
whirring

ci-
cadas
pulsing

chanting from the treetops

sending
forth their
booming
joyful noise!

Book Lice

I was born in a
fine old edition of Schiller

We're book lice
who dwell
in these dusty bookshelves.
Later I lodged in
Scott's works—volume 50

We're book lice
attached
despite contrasting pasts.
One day, while in search of
a new place to eat

We're book lice
who chew
on the bookbinding glue.
We honeymooned in an
old guide book on Greece

We're book lice
fine mates
despite different tastes.
So we set up our home
inside Roget's Thesaurus

While I started life
in a private eye thriller
We're book lice
who dwell
in these dusty bookshelves.

While I passed my youth
in an Agatha Christie
We're book lice
attached
despite contrasting pasts.

He fell down seven shelves,
where we happened to meet
We're book lice
who chew
on the bookbinding glue.

I missed Conan Doyle,
he pined for his Keats
We're book lice
fine mates
despite different tastes.

Not far from my mysteries,
close to his Horace

We're book lice
adoring
despite her loud snoring.
And there we've resided,
and there we'll remain,

We're book-loving
book lice

which I'm certain I read
in a book some months back
that opposites
often are known
to attract.

We're book lice
adoring
despite his loud snoring.

He nearby his Shakespeare,
I near my Spillane
We're book-loving
book lice
plain proof of the fact

that opposites
often are known
to attract.

ほたる

ひかり

夜
がぼくらの羊皮紙

ほたる
ちりちり

ほたる
きらきら

あかあか
虫の書道家
文字の練習

六本足の文字書きさ
消える言葉を

羽をつけた立派な芸術家
光をたっぷり

六月の夜にサインする
夜の絵に

ちかちか
ほたる
ほたる

ひかり
がインク
夜

ぼくたち
ほたる
ちかちか

ちらちら

ほたる
ぴかぴか

虫の書道家

文章うつして
六本足の文字書きさ

消える挿絵も
羽をつけた立派な芸術家

すばやい筆はこび
六月の夜にサインする
夜の絵に
ぼくらは
ほたる
ちかちか
ほたる

せみ

八月半ばの昼下がり
せみが二匹鳴いている

せみが五匹うなってる
北西の空には入道雲
せみが十二匹ジージーと

強力な合唱団の
大集合
甲高い声の　せ
み
のらくらと

*三年間*も
土の中

真っ暗闇にいた
今やっと地下から這い出て

堅い衣を脱いで
うたうよ

うれしそうに

熱烈な賞賛を

賞賛のうたを
太陽に向けて
せみ

せみが二匹鳴いている
空気は熱く　窯のなか
　　鉛のようにどすんと重い
五匹のせみがうなってる

十二匹のせみがジージーと
通りのあっちからこっちまで
強力な合唱団の
大集合

せ
み
のらくらと
にれの木で
*三年間*も

根と根に巻かれて
真っ暗闇にいた

登るよ
木の幹

うたうよ
よろこび
せみは
うたうよ
熱烈な賞賛を
熱と光に
賞賛のうたを

せみ

	ミーン
ミー	
ン	せ
	み
	ウィーン
ウィー	
ン	せ
	み
	ツクツク
ツクツク	
木のてっぺんからうたうよ	木のてっぺんからうたうよ
大	
合唱	大
大音響の	合唱
せみしぐれ	大音響の
よろこびの音	よろこびの音

本のしみ

ぼくはシラーの
古い豪華本の生まれ

二人はこのほこりをかぶった
本棚の住人
本のしみ。
のちにぼくはスコットの作品
第50巻に引っ越した

過去はこんなにちがうけど
惹かれあった
二人は本のしみ。
ある日、新しい食事場所を
さがしてるうちに

本の背をとめる糊を
食べるさ
二人は本のしみ。
ハネムーンは
ギリシャの古いガイドブック

好みはこんなにちがうけど
よき相棒さ
二人は本のしみ。
そして新居は
ロジェットの同義語辞典

わたしはテレビの探偵もの
スリラーの生まれ
二人はこのほこりをかぶった
本棚の住人
本のしみ。

わたしの青春時代は
アガサクリスティの中
過去はこんなにちがうけど
惹かれあった
二人は本のしみ。

彼が7段落ちてきて
出会ったというわけ
本の背をとめる糊を
食べるの
二人は本のしみ。

わたしはコナンドイルがなつかしく
彼はキーツがなくて寂しくて
好みはこんなにちがうけど
よき相棒よ
二人は本のしみ。

わたしのミステリーからそう遠くなく
彼のホレースに近いところで

大きないびきも気にならず
お互い相手にくびったけ
二人は本のしみ。
そして今もそこに住み
これからもずっと同じさ

ぼくらは本を愛する
本のしみ。

数か月前に確かに
本で読んだこと
皆さんご存知のように
相反するものは
惹かれ合うってね。

大きないびきも気にならず
お互い相手にくびったけ
二人は本のしみ。

彼はシェクスピアに近いところで
わたしはスピレインのそばで
二人は本を愛する
本のしみ。
わたしたちが証明してるわ

皆さんご存知のように
相反するものは
惹かれ合うってね。

参考文献

Fleischman, Paul. Illustrated by Eric Bedows. *Joyful Noise: Poems for Two Voices.* New York: Harper Collins, 1989.

——. *Seedfolks.* New York: Harper Collins, 1997.

Allen, Marjorie N. *One Hundred Years of Children's Books in America, Decade by Decade.* New York: Facts on File, Inc., 1996.

Willard, Nancy. Illustrated by Alice and Martin Provensen. *A Visit to William Blake's Inn: Poems for Innocent and Experienced Travelers.* New York: Harcourt Brace Company, 1981.

最後になりましたが、これらの詩を一緒に楽しく読んでくださった静岡市の「スパイラルの会」の方々、またNewbery賞受賞作について一緒に考えてくださっている「地域言語文化論」受講の関西大学大学院生のみなさんに、感謝の意を表します。みなさんと共有した「共に育てるよろこび」は、このように成長しました。